経済教育ネットワーク
Network for Economic Education

大阪部会（No.96）	
日　時:	2026 年 1 月 11 日（日）15:10－17:10
場　所:	同志社大学大阪サテライト
参加者：	参加9名

【内容要旨】

最初の報告は、李洪俊氏（矢田南中学校）による「全国公立高等学校入試問題」の分析であった。十年以上前から毎年続けられているものである。今回は、2025年度の問題から5問（岩手、新潟、石川、滋賀、長崎）を取り上げ、出席者に解かせることから始まった。いずれも、グラフなど複数の資料を読み取り、主に文章で答えるタイプの問題である。出席者の解答後に模範解答や生徒による解答例が紹介され、出席者からの感想・意見交換と進められた。さらに、2026年度の問題から多数の問題を抜き出し、問題の特徴や評価についてコメントが加えられた。その後、いくつかのの問題を題材に、社会科のどの単元に該当するか、どのような授業を展開できそうか、大まかな授業構成が参考例として示された。

報告に対して、篠原総一氏（経済教育ネットワーク代表）から、このようなタイプの入試問題の比重について質問があり、李氏からはせいぜい1割程度という感触が伝えられた。もっと比重が高いのであれば、教科書を一律に教えるよりも、ケーススタディを繰り返す方が有効だというのが、篠原氏からの意見であった。その他、図表読み取りの授業をしようとしても自分で独自の資料を作るのは難しいかもという李氏の発言に対して、AIを使えば資料作成の手助けになるとの意見もあった。

次に、河原和之氏（立命館大学非常勤講師等）から、「私の中学経済授業30時間～キャラメルのミゾからはじまった授業～」が報告された。河原氏は、明治図書『社会科教育』に「大人もハマる最新授業ネタ」という記事を連載しており、その第70回（2026年1月号）の記事 https://www.meijitosho.co.jp/edudb/detail.asp?code=03801_104 が資料として配付された。そこには、ミクロ経済15回、マクロ経済15回の計30回の経済授業が紹介されており、何をねらいとする授業なのか、どのような構成なのかについて簡単な解説が加えられた。この記事の最後には、経済授業づくりの鉄則として、「学力差のないネタから社会のしくみへと誘う」、「誰もが一言いえる問いや討議課題を設定」、「対話を通して意見形成、意志決定を行う」などのポイントがあげられている。

最後に、篠原代表から2026年夏の経済教室について、中学公民と高校公共を分けずにセッションを設けることや、激動する国際政治の具体的事象、教育現場とAIなどのテーマを考えていることなどが述べられた。また、2025年夏の経済教室で報告された「経済教育の見直し」がさらに進展していること、新しい教科書を作るために、見本になる箇所の執筆から始めようとしていることなどが説明された。

（文責：野間敏克）

次回開催予定： 2026年4月12日（日）15:00～17:00、場所未定